慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	時間の換喩とその周辺
Sub Title	Metonymy, metalepsis, and related issues
Author	篠原, 俊吾(Shinohara, Shungo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.142 (2021. 2) ,p.27- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小屋逸樹先生・小瀬村誠治先生・ロバート・ギブソン先生退職記念特集号 論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000142-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時間の換喩とその周辺*

篠　原　俊　吾

1．はじめに

換喩（メトニミー）と呼ばれている現象は，一般的に「2つのものごとの隣接性にもとづく比喩」（佐藤 1992a）と定義づけられる。典型的には「自転車をこぐ。」の「自転車」が「自転車のペダル」を表し，「ロン毛はだめだ。」の「ロン毛」が「長髪の人」を指すような空間的な近接関係に基づくものがそれに相当する。一方で，例えば，survey という単語が「調査」そのもののみならず，「調査結果」を指すように，1つの出来事の中の異なる側面に視点を当てることで複数の意味を持つ事例も数多く存在する。本稿では，この時間の経過に関係する換喩とその周辺領域に焦点を当てる。以下，時間の関係する換喩，周辺領域である転喩，そして，推論や間接発話行為の関わる現象を概観し，最後に，これらをより包括的な形で捉える道筋を模索する。

2．名詞の中のプロセス[1)]

名詞の中にはその意味に時間の経過を内包し，時間内に生じたさまざまな側面に着目することから複数の意味を持つものがある。例えば，establishment（制度などの設立，設置，制定，地位の確立）は元来，行為そのものも指すが，その結果としてできた設置されたもの（法律，規則，制度）や地位などを確立する行為を行った結果，地位を築いた人（体制派，支配者層）も意味する。さらにより細かい焦点移動を含む名詞を見てみよう。choice という語は，もともとは選択行為全体を指すが，選んでいく過程のさまざまな部分に焦点が当てられ，複

数の意味を持つようになったと考えられる。物事を選ぶ過程には前提条件として，①選ぶ権利，そして，②選択肢が必要になる。さらに，実際に③選択行為をすると，その結果，④選ばれたものが存在し，⑤選んだ対象の（「選りすぐりの」という）評価が伴う。このような 5 つの意味は，「選ぶ」というプロセスの中での視点移動の結果生じたものと考えられる。[2)]

（1）　選択権　　I had no choice.（選択の余地はなかった。）
（2）　選択の範囲　　You can have a sofa made in a choice of forty fabrics.
（40 種類の中からお選びいただいた生地で，ソファをお作りします。）
（3）　選択すること　　the choice between good and evil（善悪の選択）
（4）　選ばれたもの　　This disk drive is the perfect choice for your computer.
（このディスク・ドライブは，あなたのコンピュターにぴったりです。）
（5）　選択の評価　　a variety of choice foods（さまざまな選りすぐりの食べ物）

3．形容詞の中のプロセス

次に形容詞を見てみよう。healthy という形容詞は，一般的に「（人や肉体が）健康的な」という人，体の特徴を表す語であるが，例えば，healthy exercise の healthy は（excersise そのものが健康的なわけではなく）「人を healthy にするための」という意味である。healthy exercise を行うことで healthy body（健康的な肉体）が手に入れられるので，前者の healthy と後者の healthy は「原因」「結果」の因果関係にある。さらに，healthy body になると，それに伴って，結果的に healthy appearance（健康的な見た目）になるので，healthy appearance の healthy は「健康になった結果得られた」という意味である。ここでも，health body の healthy と healthy appearance の healthy の間には原因と結果の関係が成立する。このように，「運動」「肉体」「外見」に用いられる 3 つの healthy の意味は healthy が関係する事象の中の異なる側面に注目した結果生じたものであると

考えられる。[3]　次に，comfortable や sad のような体感や感情を表す形容詞を見てみよう。

（6）　a. I found this sofa comfortable.
　　b. I felt myself confortable on this sofa.
（7）　a. His story was really sad.
　　b. I felt sad when I heard the news.

（6）の 2 つの文に用いられている comfortable は，それぞれ，（6a）が対象の性質を表すのに対し，（6b）は知覚者の体感を表す。西村（2002:306）でも指摘されているように，対象がそのような性質を持っているからこそ，知覚者がそのような体感を得られるという図式が成り立つため，（6a）の comfortable と（6b）の comfortable の間には原因，結果の因果関係が成立している（つまり，ソファが人を comfortable にする性質を持っているから，その結果として，人がソファを comfortable と感じる）。同様に sad の場合も，対象の特徴を表す（7a）の sad と知覚者の感情を表す（7b）の間には，人を悲しい気持ちにさせる話があったことが原因で知覚者が悲しいと感じるという結果につながる因果関係が成立しており，多義的な性質を帯びるのは時間の経過（近接性）が関係しているからである。

4．動詞の中のプロセス

次に動詞の例を見てみよう。例えば，miss は何かを失うことと，失った結果生ずる喪失感が一体化した動詞であり，その 2 つの側面が一連の流れの中の「失う」「寂しく思う」という意味に現れている。また，書類に何かを「記入する」ことを fill in，fill out の両方を用いて表現するが，fill in は文字が紙という一定の枠内に書き込まれる側面，つまり行為の前半を指し，fill out は枠内に入った文字が用紙の上に拡大していく側面，つまり行為の後半を指す。これも「記入する」という 1 つの出来事の異なる側面がクローズアップされた例であ

る。さらに多くの局面を持つ（8）を見てみよう。

（8）　a. John locked the door.
（ジョンはドアに鍵をかけた。）
b. John locked the room.
（ジョンは部屋に鍵をかけた。）
c. John locked Mary out.
（ジョンはメアリーを締め出した。）
d. John locked Mary in the room.
（ジョンはメアリーを部屋に閉じ込めた。）

西村（2002 : 294）で指摘されているように，上の（8a）から（8d）は時間に沿った一連の経過が 1 つの動詞で示されている。最初に鍵をかけると（= 8a），結果，部屋に出入りができなくなり（= 8b），出入りができなくなった結果，部屋の外にいる人は部屋から締め出され（= 8c），部屋の中にいる人は部屋の中に閉じ込められることになる（= 8d）。鍵をかけるという一連の行為は，詳細に見ていくと鍵を使ってドアを施錠する初動の段階から，施錠の結果そこに関わる人がどうなったかという結果までを意味することができる。

一連の流れの中の異なる部分に着目することで，同じ動詞でありながら，複数の意味が生じるさらなる例として，「移動」「所有」および「移動」「状態変化」を表す交替現象を挙げることができる。

（9）　a. John sent a postcard to Mary.［絵はがきの移動に着目］
（ジョンはメアリーに絵はがきを送った。）
b. John sent Mary a postcard.［受取手の所有に着目］
（ジョンはメアリーに絵はがき送った［メアリーは絵はがきを受け取った］。）
（10）　a. John loaded hay onto the truck.［干し草の移動に着目］
（ジョンはトラックに干し草を積み込んだ。）
b. John loaded the truck with hay.［トラックの状態に着目］

（ジョンはトラックを干し草で一杯にした。）

（9a）は「対象物の移動」（すなわち，絵はがきが受取手へ移動していること）に着目した表現であるのに対し，（9b）は「移動の結果」（すなわち，受取手が絵はがきを受け取った）結果生じる所有に着目した表現である。同様に，（10a）は移動（干し草→トラック）に着目した表現で，（10b）は，移動対象が移動した結果の状態変化（トラックが干し草でいっぱいになっている状態）に着目した表現である。[4)]

5．時間の換喩の周辺（1）：転喩（メタレプシス）

伝統的に，転喩は「結果によって原因を，或いは後件によって先件を（もしくはその逆）表す換喩の一種」（佐々木 2006：451）と定義され，換喩の一部として扱われてきた。[5)] 本稿では，換喩を（前節で触れた lock, send, load などのように）同じ動詞の中の視点移動に限定し，それを超えた「同一の事態をはさんで両がわの相を認識する，視点の切りかえ」（佐藤 1992b：118）を含む現象を典型的な換喩とは区別し，転喩として議論する。以下，転喩の具体例を見ていこう。

（11）　袖を濡らす（泣く→袖が濡れる）
（12）　徳利を空ける（酒を飲み干す→徳利が空く）[6)]
（13）　raise one's eyebrows（驚く→眉毛が上がる）

（11）は「袖を濡らす」という表現で先行する「泣く」を表し，（12）は，酒を飲み干すという先行する事柄を「徳利を空ける」という結果で表している。これらは，いずれも結果で先行する物事を表す表現である。転喩の存在意義は「思考の動きに従ったずらし」（佐々木 2006：451）である。例えば，（11）では，袖が濡れているのを見て泣いたことを思い計り，（12）では，徳利が空いているのを見て初めて酒を飲み干したことがわかる。

驚きを描写する表現に転喩は多用される。日本語で驚き（およびその後のあき

れた気持ち）を表すのに，「開いた口が塞がらない」「目が点になる」というような表現を用いるが，これは先行する驚きの気持ちを結果である顔の表情で示している例である。英語の例を見てみよう。（13）は raise one's eyebrows（眉毛を上げる）という結果（表情）を用いて先行する驚きを表している。また，驚嘆すべき物事を eye-opener，jaw-dropper と言うが，これらも同様に，「目を見開く」，「顎が落ちる」という驚嘆の表情（結果）によって原因（驚き）を表す転喩の例であると考えられる。

さらに，ジェスチャーを言語化し，その動作が表す意味を間接的に伝える（後続で先行を表す）例も存在する。例えば，give … two thumbs up（～を認める）は両親指を立てる容認のポーズ（two thumbs up）を言語化することで自分が認めていることを表す。また食べているものが美味しい時用いる，finger-licking good（食べ物のついている指を舐めてしまうくらいに美味しい）は，指を舐める様を言語化することで間接的に美味しさの程度を伝えている。これらの例も広い意味での転喩の例と考えられる。

6．時間の換喩の周辺（2）：推論

次に，談話のレベルにおいて時間の近接性が関係する現象を見ておく。[7)]

（14）　I ordered a pizza and we drank loads of red wine.
（ピザを注文して，赤ワインをたくさん飲んだ。）

（15）　I ordered some new books from USA.
（アメリカから新しい本を取り寄せた。）

（14）（15）の order は「注文をする」ことを述べているが，（14）では注文したものを食べること，（15）では新しい本を入手することまでを含意している。これらの含意が理解できるのは，注文したものはその後手元に届くという推論が働いているからである。同様に，例えば John has gone to Scotland. は今ジョンがここにいないことが含意され，Mary has lost her key. は，今メアリーの手

元に鍵がないことが含意される。このように，先行する行為から後続する結果が推論によって導き出されることがある。[8)]

さらに，Gibbs（1994 : 327-328）は以下のような例においても同様に推論が働いていることを指摘している。

（16）　A: How did you get to the airport?
（どうやって空港まで行ったの？）
B: I waved down a taxi.
（タクシー拾って［手を降って止めて］。）

（16）の B の発話は，字義通りに解釈すれば，A の「どういう方法を用いて空港まで行ったのか。」という質問の直接的な答えにはなっていない。Gibbs は，このような会話を理解できるのは，以下のように目的地までの移動に関する一連の知識を聞き手と話し手が共有しているからであると説明している。

【前提】移動には車が必要（自分で運転する，誰かに乗せてもらう）
① 車に乗る，エンジンをかける
② 目的地に向けて運転する
③ 車を止める，降りる
④ 目的地に着く

したがって，②に当たる drive my car（自ら運転する）でも，①に当たる hop on a bus（バスに飛び乗る），stick out my thumb（親指を立てる：ヒッチハイクするときのジェスチャー）でも，スクリプトの中の一部が示されると一連の流れ全体が想起できるため目的地に到着することが容易に推測可能になる。このような事例においては，発話の一部とスクリプト全体が換喩的な関係になっていて，視点移動があったと考えられる。

7．時間の換喩の周辺（3）: 間接発話行為

本節では，間接発話行為においても時間の近接性が重要な役割を果たすことを論じる。Panther and Thornburg（1998）は Can you pass me the salt?（塩取ってくれる？）のような依頼文や「ねえ鉛筆持ってる？」と聞かれたら貸して欲しいという意味であることが理解できるのは，このような表現を聞いた時，聞き手は以下のような依頼に関する一連の流れ（依頼のシナリオ）を想起し，それが発話の意図全体を理解するための推論の手助けになっているからであると指摘している。

【前提】　話し手は聞き手に X（行為）をしてもらいたい。
① 話し手は何らかの形で聞き手に X をするように仕向ける。（依頼［示唆］）
② 聞き手は，X をした方が良い状況になる。
③ 聞き手は自らの意思で X を行う気持ちになる。
④ 聞き手は X を行う。

さらに，話し手が聞き手に何らかの依頼をする（つまり①に至る）ためには，その前提として，例えば，以下のような条件が満たされていなければならない。

（条件 1）聞き手が話し手の求めるものを持っている。
（条件 2）聞き手が行為 X を行うことが可能。

「鉛筆持っている？」と隣の友達に声をかける場合，また，お店に行って「○○はありますか？」と購入したいものの存在を確認するのは（ものが存在しなければ買えないので）（条件 1）を確認していることになる。Can you pass me the salt? のように can を用いれば，（条件 2）の（聞き手の）能力を確認していることになる。一連の流れをまとめると以下のようになる。

【前提】　話し手は聞き手に X（行為）をしてもらいたい。

（条件 1）聞き手が話し手の求めるものを持っている。
（条件 2）聞き手が行為 X を行うことが可能。

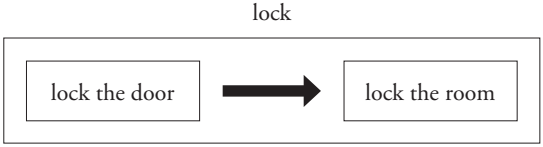
① 話し手は何らかの形で聞き手に X をするように仕向ける。（依頼［示唆］）
② 聞き手は，X をした方が良い状況になる。
③ 聞き手は自らの判断で X を行う気持ちになる。
④ 聞き手は X を行う。

聞き手は，（条件 1）（条件 2）に関する質問をされると，これら一連の依頼シナリオが活性化され，相手が依頼をしてきている（つまり，①）が理解できる。何か物事を聞き手に依頼するということは聞き手の負担になりかねない。そのため依頼主は聞き手に直接負担を押しつけるのではなく，できるだけ依頼内容を間接的に伝え，それを察した聞き手が自らの意思で決断し行っているというシナリオに持ち込む必要がある。このように，本来あるべき直接的な依頼から，依頼の前提を質問するという方法を用いることで，話し手は聞き手に対して直接的な負荷をかけることなく依頼が可能になる。前節の（16）の場合同様，ここでも発話の一部とスクリプト全体の間で，部分と全体の関係が成り立ち，換喩的な視点移動があったと説明することができる。

8．包括的な説明への試論

ここまで，さまざまな時間の関係する換喩表現，および，その周辺的現象として転喩，推論，間接発話行為を概観してきた。本節では，これらの現象の関係を整理し，全体を統合的に説明することを試みる。まずはじめに，時間の隣接性に基づく換喩のメカニズムを改めて確認しておく。

（17）



4 節で論じたように，（17）ではドアに鍵をかけたこと（lock the door）により，部屋への出入りができなくなる（lock the room）という（ほぼ同時でありながら）先行，後続の関係が成り立つ。 lock という概念が提示されると，lock に関する知識が想起され，我々は場面に応じて lock という一連の出来事の中の異なる側面に焦点を合わせることができる。換言すると，lock the door , lock the room は，いずれもあくまで lock の中の一側面であり，独立して別の事象と見なすことはできない。それに対し，転喩の場合，「泣く」「袖を濡らす」のように，先件，後件はそれぞれが独立した事象として成り立ちうる（泣いたら必ず袖が濡れるわけではない。また，袖を濡らす原因は涙とは限らない）。ここから，転喩を成立させる条件の 1 つとして，「先件，後件は独立した事象でありながら，知覚者は全体を（例えば，原因と結果のように）連続した一連の出来事として認知している」ことが重要であることがわかる。

さらに，転喩の内実を明らかにしてみよう。佐藤（1992b: 107）は，転喩の特徴として，「たいていの転喩的認識は，文化の中のステレオタイプあるいは習性に依存している。」という点を指摘している。例えば，「袖を濡らす」「徳利を空ける」「開いた口が塞がらない」「目が点になる」など転喩はその多くが慣用表現であり，その表現から言語化されていない先件が瞬時に理解できる。転喩が「文化の中のステレオタイプあるいは習性に依存する」傾向にあるのは，5 節において触れた「思考の動きに従ったずらし」（佐々木 2006：451）という転喩の定義と関係がある。佐藤（1992b: 103-104）は，下記のような井上ひさしの『四十一番目の少年』の一節を取り上げてこの特徴を説明している。

孝が利雄の腕を枕にして，
「いんちき」
と口を尖らせたような口調になった。利雄はしつっこく続けた。
「きょうだい」
孝の返事はなかった。返事のかわりに，利雄の腕の上で孝の頭が重くなった。
（井上ひさし『四十一番目の少年』）

上記の引用では，利雄が最初に気がついたのは，孝の返事がないこと，そして，頭が重くなったことであり，そこから推測して，孝が「いつの間にか眠っていた」ことに気がつくという利雄の自然な思考の流れが示されている。佐藤（1992b）は，それは誰しもが納得するような思考の流れであるがゆえに言語化されていない先件の相（つまり，孝がいつの間にか眠っていたこと）を明示せずとも容易に理解することができると指摘している。これを別の角度から見ると，先件と後件の間に誰もが納得するような自然な推論の過程（ここでは，結果から理由を推測する過程）がなければ，読み手の共感は得られにくくなり，転喩としての機能を果たさないことを意味する。慣用表現が自ずと現れやすくなるのはおそらくこのためである。つまり，誰しもが瞬時に理解できる表現を用いれば，明文化しなくても読み手は容易にその前後の関係を導き出すことができるからである。

以上の考察を踏まえると，典型的な転喩的認知には，（1）先件，後件は独立した 2 つの事象である，（2）知覚者の思考の流れに沿った認知である，（3）後件（または先件）を最初に認知すると，その前後に（原因や結果といったような）何か連続した別の出来事があることがわかり，それを即座に補うことができるという 3 点が重要であると結論づけることができる。

これらの特徴を持つ捉え方を，より一般的な認知機能に落とし込めば，補完能力に相当する。補完は日常生活でも極めて重要である。我々は，通常，自分が捉えようとする対象の前に障害物があって全体が見えなければ，障害物の背後にある見えない部分を推測で補って対象全体を理解しようとする。これは，対象が視覚的に認知できなくても同じである。例えば，映画で家の窓の明かりが消えるシーンが出てくれば，実際に就寝の場面が出てこなくても，住人が床

についたことがわかり，お墓の前でみんなが涙しているシーンが出てくればその前に誰かが亡くなったことがわかる。我々は日頃の経験を手掛かりに，実際に目撃していなくとも，目の前で広がる光景の前後で起きた出来事を最もあり得そうなパターンで埋めて，状況のつじつま合わせをしている。転喩は，まさしくこのつじつま合わせのための補完である。このように，知覚者の思考の流れに沿って，つじつま合わせのプロセスを知覚者目線でなぞることで，知覚者の心の動きが追体験できることになり，転喩を用いない一度内容を整理してしまった標準的な表現よりも明らかに臨場感が溢れ表現効果がある。

補完という大きな捉え方をすると，6 節で論じた推論も，補完の一種と見ることができる。典型的な転喩に見られた「後件→先見」（お墓の前で涙している人を見て誰かが死んだことを知る）パターンに対して，6 節で扱った推論の事例の多くは，家の明かりが消えたのを見て，家主が就寝したことを知る「先見→後件」のパターンになる。さらに（16）のような空港までの行き方を質問する対話の例は，背後に我々が共有する空港までの行き方に関するスクリプトがあり，その中のある一場面が与えられるとスクリプト全体が想起でき理解に至ると説明されてきたが，厳密に言えば，（どうやって空港に行ったのか聞かれた時）「タクシーに手を振って（止めて）」という先件を受けて，その後の空港までの足取りが後続する後件として補完されているわけである。

一連の流れの中の異なる相を補完するという点では，間接発話行為の例もこれに該当する。7 節で示したような（聞き手の）能力を聞く Can you … ? の疑問文が依頼の意味にたどり着くまでの途中のプロセスは，顕在化させようと思えば存在するものの，一度慣習化しこのパターンが自動化してしまうと，Can you … ? 疑問文＝依頼という直接的な結びつきが生まれ，「塩をとる能力がある？」という先件を示唆することで聞き手は「（あるなら）取ってください」という後件を自然な流れとして補完する。

ここまでの議論を踏まえて，全体の関係性を再度まとめておこう。1 つ目は換喩の周辺現象の扱いである。換喩の機能は 1 つの領域の中の視点移動であるのに対して，転喩の機能は，知覚者の思考の流れに沿った補完である。さらに，この補完という一般的な概念により，推論，間接発話行為の事例も統合的

に説明することが可能になる。

2つ目は，転喩の位置づけである。典型的な転喩に現れる慣習性の高い慣用表現では，先件，後件が予めほぼ一義的に決まってくるため，後件から先件（またはその逆）への単なる視点移動のように見える。確かにこのような事例においては，転喩は極めて換喩に近く，慣習性の高い表現に限って言えば，換喩の延長線上にあると考えることも可能である。しかし，換喩とは異なり，転喩は，出来事と出来事の間の前後関係を読み込まなければならず，その読み込みの可能性は無数に存在する。つまり，慣習的でない事例においては，一時的な文脈や極めて特定の情報に基づき前後関係を補わねばならないこともあり，読み手がうまく前後関係を埋めることができない事例や，複数の補完候補が存在し，うまく選べないこともある。[9] 同じ百科事典的知識の中の視点移動である換喩の場合，このようなことは起こりにくく，この点で換喩は転喩とは決定的に異なる。[10]　したがって，表面上は，換喩と転喩は密接な関係性を保ちつつも異なる認知に基づく現象であるがゆえに，両者は厳密には区別して扱う必要がある。

9．おわりに

本稿では，時間の経過が関わる換喩とその周辺領域を巡り，全体を包括的に説明することを試みた。まず，時間に関わる換喩表現および関連する現象を概観し，転喩の特徴（①先件，後件は異なる事象である②知覚者の思考の流れにあった認知である③先件（後件）に継続する何かをすぐに導き出せる）を考察した。さらに，その議論を踏まえて，転喩を補完の1つと見なし，推論，間接発話行為なども同種の補完的な機能に基づくものであると主張した。最後に，換喩と転喩の関係性を明確にした。換喩は1つの事象内の多様な側面に焦点を移動させる捉え方であるのに対し，転喩の主な特徴は補完であり，両者は，典型的な事例においては極めて似たような振る舞いをするものの，その根底では異なる認知様式に基づくものであり，緩やかに繋がりはあるものの厳密には区別して扱うのが妥当であると考えられる。

註

＊本稿は，篠原（2019）の第 7 章の論点を整理し，新たに加筆修正したものである。

1)　ここでは「プロセス」という用語は「何らかの物事が進行する時間の経過も含んだ一連の流れ」という意味で用いる。

2)　例文は，Oxford Dictionary of English 2nd edition より引用。

3)　「肉体が健康的な」という意味との類似性から「（組織が）健全な」という意味が現れ，組織が健全であれば利益がそれなりに出るので，healthy profit のように「（利益の量が）かなりの」という意味が現れる。組織が健全であることで結果的に健全な利益が出るので両者は時間が関係した（原因と結果の）換喩と考えられる。瀬戸他（編）（2007）参照。

4)　池上（1995 : 149-152）を参照。

5)　佐々木（2006），佐藤（1992b）は転喩を換喩の一部とはしない立場をとる。また，先件で後件を表す転喩（例えば，「筆をとる」，「舵を取る」「（食べ物を）流し込む」「腰を下ろす」など）も存在するが，本稿では，主に，後件で先件を表す例を用いて議論を進める。

6)　篠原（2019）の中では，（12）は「徳利を空ける→酒を飲み干す」の順で示したが，実際は，徳利が空いているという結果を見て，すでに酒を飲み干してしまったことに気がつく事例が典型的であるため，ここでは「酒を飲み干す→徳利が空く」という結果で原因の事例として紹介する。

7）　Littlemore（2015: 25）

8)　鍵の例は Panther and Thornburg（2010 : 241）から引用。例えば，in ten minutes で時間内の最終地点（10 分後）を指したり，across the street で渡り終えた最終地点を指すように，一般に出来事の最終地点に着目する傾向がある。このような事例も結果に着目する視点移動が関係していると考えられる。

9)　換喩と異なり，転喩がうまく機能しない事例に関しては，佐藤（1992b：3 章）を参照。

10)　佐藤（1992a）は換喩の視点の遊動性について論じている。換喩の場合ターゲットになりうる候補は複数存在しても，あくまで同じ特定の領域内の移動であり，その範囲も限定的である。

参考文献

Gibbs, Raymond W.（1994）*The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*, Cambridge University Press, Cambridge.［辻幸夫，井上逸兵（監訳），小野滋，出原健一，八木健太郎（訳）（2008）『比喩と認知　心とことばの認知科

学』，研究社，東京.］
池上嘉彦（1995）『英文法を考える』ちくま学芸文庫，筑摩書房，東京.
池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚』NHK ブックス，NHK 出版，東京.
Langacker, Ronald W（2009）“Metonymic Grammar,” in K.-U.Panther, L. Thornburg, and A. Barcelona eds., *Metonymy and Metaphor in Grammar*, 45-71, John Benjamins, Amsterdam.
Littlemore, Jeannette（2015）*Metonymy: Hidden Shortcuts in Language, Thought and* Communication, Cambridge University Press, Cambridge.
西村義樹（2002）「換喩と文法現象」『認知言語学Ⅰ：事象構造』（西村義樹編）285-311，東京大学出版会，東京.
Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg（1998）, “A Cognitive Approach to Inferencing in conversation,” *Journal of Pragmatics*, 755-769.
Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg（2000）“The Effect for Cause Metonymy in English Grammar,” in A. Barcelona ed., *Metaphor and Metonymy at the Crossroads,* 215-231, Mouton de Gruyter, New York.
Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg（2003）*Metonymy and Pragmatic Inferencing*, John Benjamins, Amsterdam.
Panther, Klaus-Uwe and Linda L. Thornburg（2010）, “Metonymy,” in Dirk Geeraerts and Hubert Cuychens eds., *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics,* Oxford University Press, Oxford.
佐々木健一（監）（2006）『レトリック事典』，大修館書店，東京.
佐藤信夫（1992a）『レトリック感覚』，講談社学術文庫，講談社，東京.
佐藤信夫（1992b）『レトリック認識』，講談社学術文庫，講談社，東京.
篠原俊吾（2002）「「かなしさ」「さびしさ」はどこにあるのか」『認知言語学Ⅰ：事象構造』（西村義樹編）261-284, 東京大学出版会，東京.
篠原俊吾（2019）『選択の言語学　ことばのオートフォーカス』，開拓社文化選書，開拓社，東京.
瀬戸賢一（1997a）『認識のレトリック』，海鳴社，東京.
瀬戸賢一（1997b）「意味のレトリック」『文化と発想のレトリック』（巻下吉夫，瀬戸賢一著），93-175, 研究社出版，東京.
瀬戸賢一（編集主幹），武田勝昭，山口治彦，小森道彦，宮畑一範，辻本智子（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』，小学館，東京.